

外部指導者によるタグラグビー授業に関する事例研究  
～ 小学校における外部指導者導入とプログラムの評価 ～

永友 洋司 勝田 隆

キーワード：タグラグビー，外部指導者，ラグビースピリッツ

A case study of the tag rugby class by the outside leader  
The outside leader introduction in an elementary school and the evaluation of the  
program

Yoji Nagatomo Takashi Katsuta

Abstract

Through a distinctive program and method of teaching tag rugby, the Students gained confidence and learned the joy of playing the game. Additionally, by incorporating the spirit of rugby they learned how to be more positive with others.

The use of outside instructors caused an appropriate amount of tension and was effective in causing the students to learn with an open-minded attitude.

Key Words : Tag rugby, The outside leader, Rugby spirits

## I. はじめに

1. 「タグラグビー<sup>注1)</sup>」が新しく学習指導要領解説書へ平成20年の学習指導要領改訂において「タグラグビー」は、小学校学習指導要領解説・体育編に、小学校3学年・4学年、5学年・6学年のゴール型ゲームの教材として例示された。

タグラグビーは、「アメリカンフットボールのフラッグゲームを参考にして、腰につけたハンカチを取ることでタックルが成立するという南アフリカで行われていた遊びが原型とされ、1990年代の初めに英国ラグビー協会のスタッフがラグビー普及と青少年育成の為にルールと用具を考案して自国に導入した」とされている。

近年、タグラグビーは小学生を中心に年々普及し、教科体育の教材の一つとして扱われるまでに至っている。しかし、日本の体育科教育にとってのタグラグビーに関する教材研究は、日も浅く、関連する研究論文についても、黒川<sup>1)</sup>、鈴木<sup>2)</sup>、岩田<sup>3)</sup>、吉國<sup>4)</sup>、野口<sup>5)</sup>、長見<sup>6)</sup>らの論文が散見されるもののその数は極めて少ない。

この点について勝田は、平成20年5月に全国の学校現場体育教師らが「運動の意欲を高めるための学習指導の在り方」や「指導と評価の一体化に向けた学習指導の在り方」について研修する「平成20年度子どもの体力向上指導者研修会・東部地区」（独立行政法人教育研修センター主催）において、「体育授業においてラグビーに関する教材研究が少ない」ことを指摘した、「誰でも楽しめる授業（生徒）」「誰でも教えられる授業（教師）」「何処でもできる授業（学校＝施設）」の開発と普及が急務であることを指摘している。

### 2. 「求められる外部指導者」

文部科学省は、平成18年度に教員勤務実態調査を実施し、これによると「残業時間は1か月当たり平均約34時間に及んでいること、学校の運営にかかわる業務や外部対応など学習者と直接かかわることのない業務に、1日当たり平均2時間程度と多くの時間が割かれていることなどが分かり、教員の学習者と向き合う時間を拡充することが緊急の課題となっている」と報告している。

外部指導者を体育の授業に導入することについては、10年も前から、その必要性は謳われている。平成10年10月に文部科学省から発刊された「我が国の文教施策」においては、「教育職員免許法に基づく『特別免許状制度』や『特別非常勤講師制度』を活用し、特定運動分野における専門的知識や経験を有する外部指導者を『体育、保健体育』の授業やクラブ活動の指導に迎えることにも積極的に取り組んでいかなければならな

い」ことが明記されている。外部指導者を学校の体育授業に招聘する動きは、指導内容の高度化や教員の多忙化に対する対策として、今後、益々加速化することが予想される。

### 3. 「ラグビースピリッツ<sup>注2)</sup>」の教育プログラム化

「タグラグビー」がゴール型ボール運動のひとつとして新しい小学校学習指導要領解説・体育編に「例示」されたことは冒頭述べた。

この中で「ボール運動系」学習における「態度」に関する学習目的は、「ボール運動系の領域として、低・中学年を『ゲーム』、高学年を『ボール運動』で構成し」、「これらの運動は、勝敗を競い合う運動をしたいという欲求から成立した運動であり、主として集団対集団で競い合い、仲間と力を合わせて競争することに楽しさや喜びを味わうことができる運動」と位置づけ、「ゲームの学習指導では、仲間と協力してゲームを楽しむことの工夫や楽しいゲームを作り上げることが、児童にとって重要な課題となってくる。集団で勝敗を競うゲームでは、規則を工夫したり作戦を立てたりすることを重視しながら、簡単な動きを身に付けて、ゲームを一層楽しくしていくことが学習の中心となる。また、公正に行動する態度、特に勝敗の結果をめぐって正しい態度や行動がとれるようにすることが大切である。」「これらの運動は、ルールや作戦を工夫して、集団対集団の攻防によって競争することに楽しさや喜びを味わうことができる運動である」と記述されている。つまり、小学校の小学校学習指導要領解においては、①ルールや規則を守ること、あるいは工夫すること、②仲間と協力してゲームを楽しむこと、③競争することに楽しさや喜びを味わうこと、④公正に行動する態度、特に勝敗の結果をめぐって正しい態度や行動がとれる、といった表現が中心であり、そのための方法や指針となる学習モデルは、個々の教師の力量に任せられていると推察される。

一方、タグラグビーの基本となる「ラグビーフットボール」には、フェアプレーの精神や自己規律に基づいた行動も含有し卓越したラグビー固有の「ラグビースピリッツ」と呼ばれる独特のスポーツ文化が根付いている。ラグビーフットボールというスポーツは、この精神にもとづいた行動とその発現を試合中あるいは試合以外の場で具体化することを求めてきた。そして、このことがラグビーというスポーツの教育的価値を高めてきたと言われている。

「ラグビースピリッツ」とは、ラグビーフットボールがパブリックスクールのフットボールから現在の競技としてのラグビーフットボールへと形成されていく歴史の中で、独自に育んできたものである。具体的に

は、ノーサイドの精神や、キャプテンシーなどがそれにあたると考えられる。ノーサイドの精神は、ゲーム中は敵味方に分かれて激しく戦った両者も、ゲームが終われば同じラグビー（スポーツ）を愛する仲間同士として、お互いに称え合うことであり、キャプテンシーとは、監督やコーチはゲーム中に一切指示やアドバイスをせず、キャプテンが自身のチームを統率するということである。また、レフリーがゲームに対して絶対的な権限を持ち、ゲームをコントロールし、それに対して最大限の敬意を払うリスペクトの精神もラグビースピリッツの一つである。さらに、ラグビーにおけるルールは、ロー（法）であると考えられ、単なる規則（行動の制限）ではなく、自己規律が求められる行動の規範を示していると認識できる。

このように道徳面からの教育的価値が高いと考えられるラグビースピリッツを、ラグラグビーを用いて学習者に意識させることは、ボール操作などの技術の向上や攻防に関する戦術的な理解を超えた、知的、道徳的側面からの学びとなる可能性がある。しかし、ラグビーが有する独特の文化（ラグビースピリッツ）は、「態度に関する学習」を習得する教材として高い評価を得ている（保健体育審議会答申：1997年）。しかしながら、このラグビースピリッツが内容に盛り込まれた教材研究及びその開発は極めて少ない。また、日本ラグビーフットボール協会から出版されている「ラグラグビーのHow toをわかりやすくまとめた小冊子」においても、態度に関する学習について「ゲームが終わったら、握手をしてきちんと挨拶をしましょう」。「ゲームの終了のことをラグビーでは『ノーサイド』と言います。対戦した相手チームと一緒にラグビーを楽しんだ仲間であり、ゲーム終了とともに、チームとチームの間の境が無くなるという考えからですゲームが終わったら、握手をしてきちんと挨拶をしましょう」と表記されているが、具体的に、この態度の啓発あるいは育成のために指導者がどのように教えるべきか、その具体的指針や方法論までは記述されておらず、ラグラグビーにおいてラグビースピリッツを教材プログラム化する必要性は極めて高いと考えられる。

## II. 研究目的

本研究は、学校体育「実技」授業におけるラグラグビーの教材開発と外部指導者のあり方について検討を加えることと、同時に、ラグビー固有の文化として教育的価値が高いと言われている「ラグビースピリッツ」の精神にもとづいた行動の発現を、（実技）授業においてプログラム化するための知見を得ることをテーマとしている。

本研究は、このテーマに基づいた基礎的事例研究として位置づけられるものであり、具体的には、以下のような事柄を明らかにすることを目的としている。

- 1) 「ラグラグビーの授業」は学習者にどのように受け入れられたのか
- 2) 「外部指導者」は、学習者や学校教師にどのように受け入れられたのか
- 3) 「ラグビースピリッツ」の精神にもとづいた行動の発現を、練習や試合の中で求めることを意識した指導が、学習者にどのような行動変容をもたらすのか

## III. 研究方法

### 1. 実践研究

#### 1) 対象者とプログラム実施期間

平成20年11月から12月にかけて、宮城県仙台市立K小学校3学年の2クラス、1組38名、2組39名の計77名を対象とし、ラグビースピリッツを教育プログラム化した指導計画（以下「モデルプログラム」）にもとづいたラグラグビーの授業を行った。指導者は、本研究の研究者であり、外部指導者という立場で授業（指導）を行なった。

#### 2) 指導計画の作成と指導にあたっての留意点

このモデルプログラムは、全5時間で構成され、1コマは、45分の授業である。計画作成にあたって留意した点は、ラグラグビーは聞いたことはある、知っていると答えた学習者はいたが、実際ラグラグビーを経験した生徒はいないということもあり、基礎的な技術とボールゲームの楽しさの体験をゲーム形式の活動を通して習得することを重視した。ラグビースピリッツに関する指導については、表1のプログラムにおける目標及び評価基準を基に、「ラグビースピリッツとは何か」、「なぜ大切か」、「どのように体現するのか」、といった説明や体験を授業のさまざまな場面において展開することとした。体験学習については、たとえば、相手や仲間、指導者や審判との握手や、リーダーを中心とした話し合いの場の設定などを、その必要性の理解とともに行動で表すことを学習者に求めることとした。

表1 プログラム目標及び評価基準

目標	①ラグラグビーの技能を身につけ、ゲームができる。 ②集団において発揮される総合力を身につける。 ③行動規範の基礎を身につける。				
評価基準	ノーサイドの精神 勝敗を意識せず、敵味方関係なくコミュニケーションがとれる。	キャプテンシー 自主性、主体性をもって取り組む姿勢	レフリーリスペクト 理解できないことは、必ず質問する姿勢	アフターマッチファンクション みんなの前で、勇気をもって発表しようとする姿勢	LAWの精神 協調性をもって取り組む姿勢
分類	敬意・尊重	意欲・自主性	自発性・規律	意欲・自主性	規律
例	立ち振る舞い	社会性	社会性	集団性	社会性

また、体育教育の中にスポーツ教育の側面を持たせるため、学習者に対して「先生」ではなく、「コーチ」と呼ばせることとした。

さらに、キャプテンシーの基盤ともなるリーダー教育の一貫として学習者間でのディスカッションの時間を多く設けることを意図した。これにより、集団性や、リーダーを中心とした問題解決能力学習が促進されることが期待できるとも考えた。

タグラグビーの特徴は、ボールゲームが不得意な子でも必ずボールに触り活躍できる場が提供できる競技と言われている。プログラム作成にあたっては、この特徴を最大限に活用するため、ゲーム形式の活動を多く

取り入れた。指導にあたっては、ゲームの中で、ボールに触れる機会が保証されること、十分な運動量が確保されること、あるいはパスを優先させるのではなく、

自分から走り、チャレンジするように指導すること、そして自分が頑張ることによって、周りの仲間にとどのような影響が出ているのかを授業の各場面に応じて説明し、仲間をサポートする意識が醸成されることなどにも指導のポイントを設定した。

表2 学習指導計画

時	活動名	主な指導・支援	形体
1	オリエンテーション	・目的（レフリーリスベクト）を理解させる。 ・プログラムを通してコーチとの約束事を2つ決める。	全 体
	ビデオ鑑賞	・実際のゲーム、それまでのプロセスを映像を通してみせる。 ・実例をみせることにより、モチベーションにつなげさせる。	全 体
	準備運動	・コーチが中心となって進める。	全 体
	ボール渡し タグ取り遊び	・ボールの形を理解しながら、自由にボールを渡す。 ・体の動き、タグの動きを考え自由に取る。	グループ
	オリエンテーション	・目的（ノーサイドの精神）を理解させるために、握手という行為を入れる。 ・目的（アフターマッチファンクション）を理解させるために、授業の感想を発表してもらう。	全 体 個 人
2	オリエンテーション 準備運動	・コーチとの約束事を発表してもらう。 ・キャプテンシーを発揮させるために、リーダーが中心となって進める。	全 体 全 体
	パスゲーム	・2人向き合い、ボールの形を理解し、走りながらパスをする。 ・出来たことを褒める。どうしたら相手を取りやすいか考えさせる。	ペ ア
	タグ取り	・1対1で、相手の動き、タグの動きを考え取る。タグ取りのヒントを与える。 ・目的（ノーサイドの精神）を理解させるために、握手という行為を入れる。	グループ
	オリエンテーション	・目的（アフターマッチファンクション）を理解させるために、授業の感想を発表してもらう。	全 体 個 人
3	オリエンテーション	・目的（LAWの精神）を理解させる。 ・コーチとの約束事を発表してもらう。	全 体
	準備運動	・キャプテンシーを発揮させるために、リーダーが中心となって進める。	全 体
	パスゲーム	・グループで、ボールの形を理解し、走りながらパスをする。 ・グループでミスが起これば、グループでもう一度はじめてから始める。どうしたらミスをなくせるか考える時間を与える。	グループ
	タグ取り タグラグビー	・2対2で、相手の動き、タグの動きを考え自由に取る。 ・3対3で、自由にゲームを試してみる。	グループ グループ
	オリエンテーション	・目的（ノーサイドの精神）を理解させるために、握手という行為を入れる。 ・目的（アフターマッチファンクション）を理解させるために、授業の感想を発表してもらう。	全 体 個 人
4	オリエンテーション	・目的（LAWの精神）を理解させる。 ・コーチとの約束事を発表してもらう。	全 体
	準備運動	・キャプテンシーを発揮させるために、リーダーが中心となって進める。	全 体
	パスゲーム	・グループで、ボールの形を理解し、走りながらパスをする。 ・グループでミスが起これば、グループでもう一度はじめてから始める。どうしたらミスをなくせるか考える時間を与える。	グループ
	タグラグビー	・チーム（4人～5人）で、ゲームを試してみる。 ・自分からチャレンジすることを意識させる。 ・仲間をサポートする大切さを理解させる。	グループ
	ディスカッション オリエンテーション	・グループで考える。 ・目的（ノーサイドの精神）を理解させるために、握手という行為を入れる。 ・目的（アフターマッチファンクション）を理解させるために、授業の感想を発表してもらう。 ・チームのためにがんばる大切さを理解させる。	グループ 全 体 個 人 全 体
5	オリエンテーション	・目的（LAWの精神・レフリーリスベクト）を理解させる。 ・チームのためにがんばる大切さを理解させる。	全 体
	準備運動	・キャプテンシーを発揮させるため、リーダーが中心となって進める。	全 体
	タグラグビー	・試合を試してみる。 ・試合をしているチームを応援する。 ・グループで作戦を考える。	全 体
	オリエンテーション	・目的（ノーサイドの精神）を理解させるために、握手という行為を入れる。 ・目的（アフターマッチファンクション）を理解させるために、授業の感想を発表してもらう。 ・自分自身の経験談を聞いてもらう。	全 体 個 人 全 体

2. 調査研究

1) 体育授業アンケート【ボール運動への興味・関心】

学習(研究対象)者のボール運動に対するや基礎的な興味・関心についてのアンケート調査を授業実施前に行なった。

2) 指導およびプログラムの評価

ラグビースピリッツが位置づけられたプログラムによって行なわれた指導において、学習者の「ラグラグビー」や「モデルプログラム」、あるいは指導そのものに対する評価は以下の方法によって行なった。

i. 全授業終了後のアンケート【ラグラグビーの授業(プログラム)に関する評価】

プログラムの全てが修了した時点で、学習者(対象者)に対してラグラグビーの授業(プログラム)がどのように受け入れられていたのかを明らかにするため、アンケートを実施し、併せて授業に関する感想文の提出を実施した。

アンケートの実施日は、平成20年12月18日から12月22日、感想文は自由記述であった。

ii. 学習カードによるアンケート【単元ごとの評価】

単元ごとの評価と授業に対する学習者の意識や意欲等の変容を明らかにするため、全5回の授業で、同じ内容の「学習カード(表3)」を作成し調査を行った。

調査は、毎授業終了直後に行なった。アンケート項目は、「意義」、「意欲」、「敬意」に関する質問を設定し、ラグビースピリッツの体現化を把握できるような項目も設定した。具体的には、「意義」については、「楽しかったか」「心に残ることはあったか」であり、「意欲」については「できなかったことができるようになったか」「自ら発表したか」であり、「敬意」についての質問は「友達と握手できたか」、「仲良くできたか」、「コーチの話をきけたか」であった。

ラグビースピリッツの体現化の把握に関する項目は、アフターマッチ・ファンクションへ繋がる行動として「自ら発表したか」、ノーサードの精神の体現化については「友達と握手できたか」などであった。

表3 学習カードのアンケート項目

分類	質問事項
意義	1. 楽しかったですか
意義	2. 心に残ることがありましたか
意欲	3. 今までにできなかった事が出来るようになりましたか
意欲	4. 自分から発表できましたか
敬意	5. 友達とあくしゅできましたか
敬意	6. 友達となかよくラグラグビーができましたか
敬意	7. コーチの話をきけましたか

iii. 学校側へのヒアリング【外部指導者プログラムの評価】

モデルプログラムに関する学校側の評価や外部指導者についての一般的なニーズを明らかにするためのインタビュー調査も全プログラム終了後に実施した。

学校側とは、本研究の調査対象となった子どもたち(以下「学習者」とする)の通うK小学校、ならびに実際に指導した他校の学習者が通う学校教員達である。調査対象となった小学校教員以外を入れた理由としては、その後の学習者の変容を調査するためである。

インタビューの内容は、「ラグラグビー(ゲームや授業内容)をどう思ったか」、「ラグラグビーの授業を行なった後の子どもたちの様子」、「外部指導者に求めるもの」であった。

IV. 結果・考察

学習者のボール運動に対する基礎的な興味・関心について、授業実施前にアンケート調査を実施した。

この結果から、図1が表すように、ボール運動が「とても好き」「好き」と答えた学習者は、合わせて91%(57人中51人)であり、ボール運動が学習者にとって楽しい活動であることがわかった。

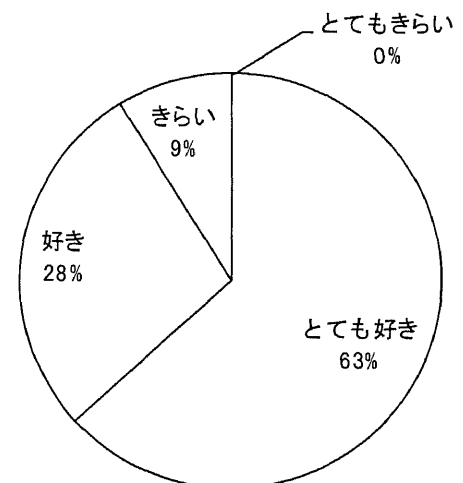


図1 ボール運動が好きですか

また、この学習者に「どんな時に(とても)好きとを感じるか」(複数回答可で)問うたところ、「体を動かしているとき」「できなかったことができるようになったとき」「できるコツがわかったとき」といった個人としての楽しみに関する因子は合わせて46%であり、「競争をする楽しさを感じたとき」「友達と協力してできたとき」「友達や先生にアドバイスを受けたとき」といった他者との関わりに関する因子(33%)をやや上回る傾向であった。

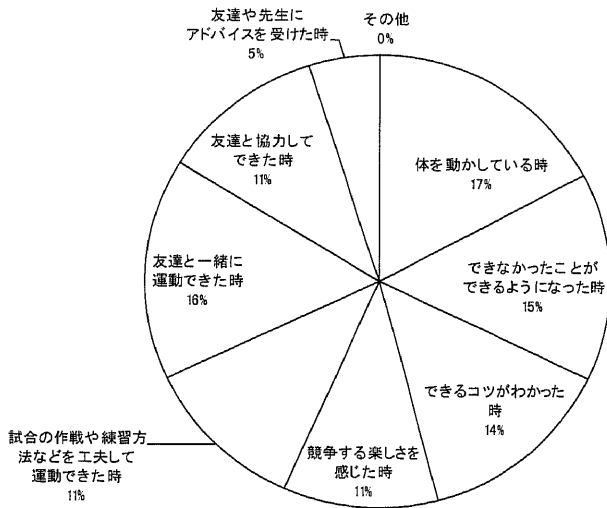


図2 どんな時に好きとを感じるか

一方、ボール運動が「とてもきれい」「きれい」と答えた学習者は、図1で示す通り合わせて9%(57人中3人)であり、「どんな時に(とても)きれいと感じるか」(複数回答可で)を問うたところ、図3が表すように、「競争」や「ルール」といった試合に関するときに生じるストレスが学習者の楽しみを阻害する大きな因子となることが示唆された。

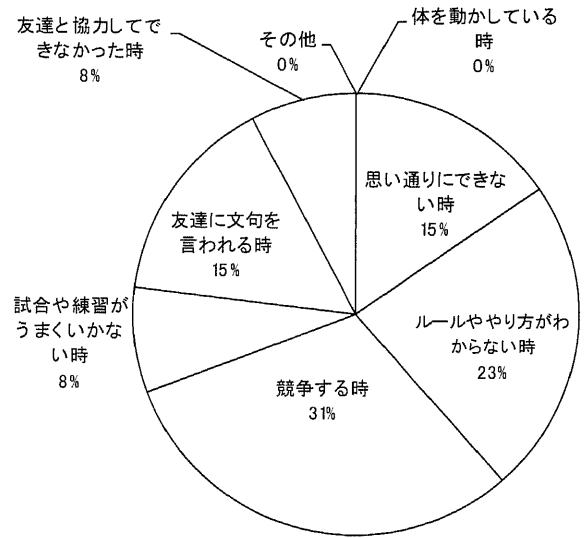


図3 どんな時に嫌いと感じるか

学習者に対する指導後の調査で、「ルールがよく分かった(図4)」(84%)、「ラグビーが楽しかった(図5)」(96%)、「ラグビーをまたやってみたい(図6)」(91%)といった肯定的なコメントが多く見られた。

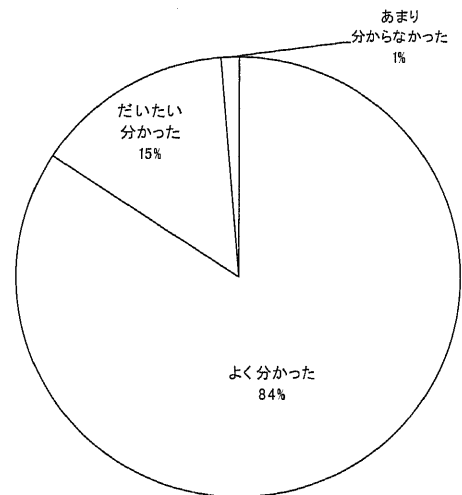


図4 あなたはラグビーのルールがわかりましたか

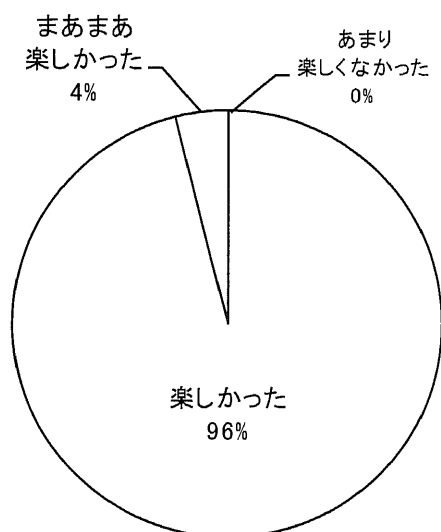


図5 タグラグビーの練習は楽しかったですか

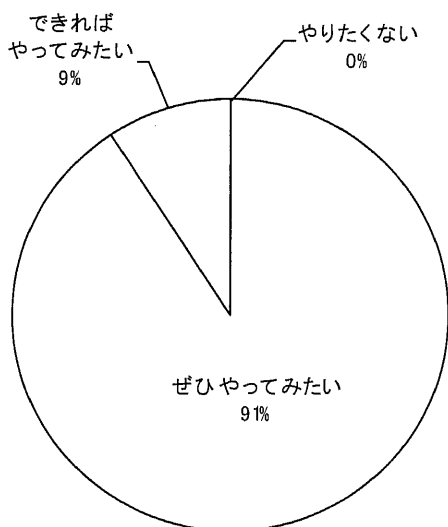


図6 タグラグビーをまたやってみたいですか

・「楽しなかった」、「やりたくない」といった否定的なコメントは見られなかった。感想文からも他者に対する肯定的コメントも(30%)と多かった(表4)。

表4 肯定的コメント

項目	内容	計
他者	コーチに関するコメント	16人 21%
	友達に関するコメント	7人 9%
ゲーム/ルール	ゲーム(ゲーム)に関するコメント	15人 20%
	ルールに関するコメント	8人 11%
チーム	チームワークに関するコメント	6人 8%
	リーダーに関するコメント	1人 1%
個人	発言の自発性に関するコメント	22人 29%
	技術に関するコメント	1人 1%

これらのことから、本研究に基づいたプログラムや指導が肯定的に受け入れられた可能性が示唆された。

また、外部指導者の人間性やその存在への期待として「子どもたちの夢づくりのきっかけ作り」、「一流選手がそこまで到達する過程」、「一流選手に触れあうこと、一緒に経験させることは将来に繋がる」といったコメント(表5)があり、外部指導者に対するネガティブな評価はしない傾向にあると感じるが、今回の研究では肯定的に受け入れられた可能性が示唆された。スポーツを通じて学校側が取組もうとしている課題への外部指導者の寄与は大きいのではないかと考えられる。

表5 学校側の評価

1	タグラグビーをどう思われましたか。 ・技術ができること、わかること、関わることの3つの要素ができていますね ・みんなで考える姿が多くみられました。 ・運動の苦手な子どもでもできるからみんな楽しそうに、時には助け合いながらやっていたね。 ・集団の中からもいろいろなことが学べそうですね。
2	タグラグビーを学んで子供たちはどうですか。 ・みんなで協力し合う姿勢が出てきています。 ・失敗があっても周りから声をかける子供たちがいます。 ・仲間意識が出てきているように思います。 ・積極的に発言する子が増えてきているような気がします。
3	外部指導者に何を求められますか。 ・憧れや、夢を持つ子どもたちが少なくなってきました。子供たちの夢づくりのきっかけを作ってほしいです。 ・一流の選手がそこまで達する過程を伝えてほしい。 ・人柄に触れさせたい。その人の生きざまを知ってほしい。 ・小さい頃に一流の選手と触れ合うこと、一緒に技を経験させることは将来につながる。 ・職業ということに対して考えさせたい。 ・教員の中だけだと考え方が狭くなってしまふ。外部指導者の方たちと話をすることで教員としての知識が広がる。 ・学校を回っていただき、沢山の子供たちと触れ合ってほしい。 ・草の根運動的なことをお願いしたい。 ・タグラグビー講習会を開いてほしい。

## VI. まとめ

本研究は、「タグラグビーの授業」は学習者にどのように受け入れられたのか、「外部指導者」は、学習者や学校教師にどのように受け入れられたのか、また、「ラグビースピリッツ」の精神にもとづいた行動の発現を、練習や試合の中で求めることを意識した指導が、学習者にどのような行動変容をもたらすのかということについて検討し、以下のようなことが明らかとなった。

①学習者がタグラグビーを通じて楽しさや、他者と関わることに建設的な意識を持ったことが明らかとなった。このことはタグラグビーのもつゲーム特性や本研究のプログラムあるいは指導によってもたらされた効

果の一つであると考えられる。

②外部指導者に対する否定的な評価を引き出すことは困難であることが予測されるものの、今回の研究では肯定的な視点からの回答が大半を占めた。また、外部指導者の体育実技授業の活用についても、学校現場では肯定的な評価がなされていたことが明らかとなった。

③「ラグビースピリッツ」の体現を促す指導の結果については、「みんなの前で発表できるようになった」といった効果が一部にみられた。ラグビーでは試合終了後、相手や仲間、審判やコーチに対して、感謝の意などを述べるアフターマッチファンクションというフォーマルな場を設けている。このような場を指導の中へ簡易的に導入することは、子供たちの発表スキルやソーシャルスキル（社会性）を向上させる可能性があると考えられる。

#### 今後の研究にあたって

本研究は、学校体育「実技」授業におけるタグラグビーの教材開発と外部指導者のあり方について検討を加えることと同時に、ラグビー固有の文化として教育的価値が高いと言われている「ラグビースピリッツ」の精神にもとづいた行動の発現を、練習や試合の中にプログラム化するために知見を得ることをテーマとして行ったが、今後はこの研究成果を踏まえ、特に「ラグビースピリッツの精神に関する教育プログラムの具現化」についてより詳細な検討を加えたいと考えている。

#### 用語の説明

##### 注1) タグラグビー

ゴール型ゲームの新しい形のラグビーで、タックルなど接触プレーを一切排除している。プレイヤーは腰にベルトをつけ、そのベルトの左右にマジックテープで2本のタグ（リボン）が着けられる。攻めるプレイヤーは楕円球のボールを抱えて走ったりパスをしたりしながら進み、相手のゴールラインを越えたところでボールを置けば1点。左右どちらかのタグをとられたら走るのをやめて、すぐにパスをしなければならない。守るプレイヤーはタックルの代わりにタグをとることで相手の前進を止める。（『日本ラグビーフットボール協会 『タグラグビーのHow to』』より抜粋）

##### 注2) ラグビースピリッツ

###### ①ノーサイドの精神

ゲーム中は敵味方に分かれて激しく戦った両者も、ゲームが終われば同じラグビーを愛する仲間同士として、お互いに称えあう精神。

###### ②キャプテンシー

ゲームを統率する力。ゲーム中はコーチ、監督は指示、アドバイスはできない。

###### ③レフリーリスペクト

ゲーム中はレフリーが絶対的権限を持つ。意義、申し立てはキャプテン一人が行う。

###### ④アフターマッチファンクション

ノーサイド終了後（試合後）の交歓会。キャプテンが代表してレフリー、敵チーム、関係者に対し感謝の意を述べる。

###### ⑤LAWの精神

LAWとは法であり、行動の規範を示すものである。ラグビーにおけるルールは、単なる規律（行動の制限）ではなく、LAWによって自己をコントロールすべきものの、自己規律が求められるのである。

#### 参考・引用文献

- 1) 黒川正紀 (1999) タグラグビーボールーラグビー型教材の定着を目指して。学校体育 53 (5) : 24
- 2) 鈴木秀人・日本ラグビーフットボール協会普及委員会 (2004) みんなでトライ！タグ・ラグビーを教える指導者のためのガイドブック。(財)日本ラグビーフットボール協会, P p. 6-30
- 3) 岩田知郎 (2000)「タグラグビーをやってみました」ー授業材料の仕入れから実践までー。学校体育 53 (10) : 1-3
- 4) 吉國幸宏 (2001) 一人ひとりの持ち味を出すタグ・ラグビー。学校体育 53 (10) : 42-47
- 5) 野口裕恭 (1999) 男女共習タグラグビー。学校体育 52-1
- 6) 長見真 (2001) 中学1年タグラグビー。学校体育 54 (11) -20
- 7) 勝田隆 (2005)「新のコーチングはアスリートをどう育てるか」。現代スポーツ評論。
- 8) 宮本久子, 遠藤忠 (2006) 一人一人を大切にした集団づくり: 児童・生徒指導の機能を生かした学級づくり。宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要。
- 9) 福澤美幸 (2006) 個を生かす指導のあり方ー学力差の大きい学習集団に応じた指導の工夫。富山大学国語教育学会。
- 10) 勝田隆 (2006) 指導者のためのスポーツジャーナル。267. 16. スポーツ指導者とは、-プレイヤーとのコミュニケーション-, 日本体育協会. p. 17. 文部省中央教育審議会 第一次答申, 平成8年
- 11) 和久貴洋 (2007) JISS-仙台大・スポーツ情報戦略連携の可能性 ~仙台大スポーツ情報マスメディア研究所設立の背景と期待~。JISS in Action.